

## 日本における作業療法士-クライアント関係についての研究状況と課題 2005年～2015年の文献レビュー

坂根勇輝<sup>1)</sup>, ボンジェ ペイター<sup>2)</sup>

1) 公益財団法人丹後中央病院, 2) 首都大学東京大学院

要旨: クライアント中心で, 作業中心の作業療法を発展させるために, 作業療法を Co-occupation として考える価値がある. 日本の作業療法士-クライアント関係 (以下: OTR-CL 関係) についての研究状況を明らかにするために, 2005 年から 2015 年の文献レビューを行なった. 日本における OTR-CL 関係についての研究は事例研究が多数を占めており, クライアントと作業療法士両者を対象にした研究は少なかった. データ収集方法において観察は少なかった. また作業科学の視点で執筆された研究は1件のみであり, 事例研究以外の研究の中で, クライアントと作業療法士の相互作用について記載があったのは, 30%であり, OTR-CL 関係についての研究を Co-occupation の視点からとらえることができるものは少なかった. さらに OTR-CL 関係を理解するためには, 作業科学の視点が含まれた研究が推進されることが望まれる.

作業科学研究, 11, 51-55, 2017.

キーワード: 共作業, 作業療法士-クライアント関係, 文献研究

### Short Report

## A Literature Review of the Situation and Problems of Research into the Occupational Therapist-client Relationship

Yuki SAKANE<sup>1)</sup>, Peter BONTJE<sup>2)</sup>

1) Tango Central Hospital, 2) Tokyo Metropolitan University

Abstract It is worth considering occupational therapy as co-occupation to develop client-centered occupation-based practice. To clarify the research situation regarding the occupational therapist - client relationship (OTR - CL relationship) in Japan, a review of relevant research literature from 2005 to 2015 was conducted. We used the data-base Ichushi to search for literature. After checking for in- and inclusion criteria 85 papers were retained for analysis. Case studies accounted for the vast majority, and studies with both clients and occupational therapists accounted were only 2. Observations in the data collection method were few. Only one study was written from the viewpoint of occupational science. Among the studies other than case studies, the interaction between the client and occupational therapist was described in 30%, but those that captured the OTR-CL relationship from an occupational perspective were few. In conclusion, to understand the OTR - CL relationship, occupational science research that includes the viewpoint of co-occupation, is needed.

Japanese Journal of Occupational Science, 11, 51-55, 2017.

Keywords: Co-occupation, Occupational therapists - Clients relationship, Literature review

## はじめに

クライアント中心で、作業に焦点を当てた作業療法を発展させるために、作業療法士-クライアント関係（以下：OTR-CL 関係）の重要性は作業療法の初期から認識されており、現代の作業療法実践の原則の一つとして、クライアント中心の実践が提唱されている（Boyt Schell 他，2014）。また、作業療法士はクライアントを尊重してパートナーとなる（WFOT，2010）と言われており、日本においては、作業療法は治療・援助する者と対象者との相互のコミュニケーションプロセスにより成り立っている（山根，2008）と言われており、さらにクライアントが作業に焦点を当て、クライアントと目標を共有できるように構成されている生活行為向上マネジメント（一般社団法人日本作業療法士協会，2017）の推進の流れは、クライアント中心の実践と同方向にある。つまり、作業療法士だれもが、クライアントとの関係を考えて作業療法を行っている。一方で、クライアントは、作業療法士との関係を、一般的に良い経験としていたが、有害である経験もあったと報告されている（Palmadottir，2006）。日本においては、回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントが、作業療法士との関係が良くない場合に努力している様子が報告されている（河野他，2015）。作業療法士とクライアント両者を対象にした研究において、Ohman 他（2014）は精神障害領域の作業療法実践中にリアルタイムで、目標設定プロセスがどのように展開されるかを理解するために、クライアントと作業療法士に観察とインタビューを行い、クライアント中心の実践と測定可能な目標の確立に対するいくつかの障壁を示した。このように OTR-CL 関係に関する研究は散見されるが、領域を問わず作業療法士とクライアントはどのようにその関係を作ったり、維持したりしているのかを明確にすることも大切だと思われる。

領域を問わない OTR-CL 関係を明確にするために、Co-occupation（共作業）（Pierce，2003）という概念をこの研究に採用した。Co-occupation とは両者が主体として相互作用を及ぼしながら行う作業（小野，2015）であり、作業に焦点を当てた知識の体系化を目指す学際的分野である作業科学（吉川，2017）において研究されている。クライアント中心で、作業に焦点を当てた作業療法においては、それ自体がクライアントと作業療法士が参加して相互作用を及ぼしながら行う作業と考えられるため、作業療法を Co-occupation として捉えることができる。そして Co-occupation の質は、その作業に関わる両者の関係性によっても左右される（吉川，2017）ため、作業科学の視点である Co-occupation として作業療法を考えると

OTR-CL 関係を理解する一助となると考えられる。さらに OTR-CL 関係の中でも特に協働について深く理解しようと思うと、クライアントと作業療法士と一緒に研究する必要があると言える。しかし、国内外を問わず、OTR-CL 関係についての研究状況に関する報告はなく、どのような研究が必要かは明確になっていない。今回は、Co-occupation を中心に作業科学の視点から OTR-CL 関係に関する研究状況について研究することによって、日本における OTR-CL 関係についての研究の課題を検討することに繋がる知見となる。研究目的は日本における OTR-CL 関係についての研究状況を明らかにすることである。

## 方法

医学中央雑誌 Web（Ver.5）において、2015 年 12 月 21 日に検索を行った。検索期間は 2005 年から 2015 年、検索キーワードはシソーラス用語「医療従事者-患者関係」and「作業療法士」とし、抽出条件を原著論文とした。除外基準は OTR-CL 関係に言及していない研究とした。分析方法はまず検索条件に該当した文献から、抄録を読み、除外基準に該当するものを除外した。適合した文献を表 1 のエビデンスレベルの分類（福井他，2007）と研究デザインの分類、作業科学の視点で執筆されているかについて分析を行った。事例研究以外の研究では、研究対象者、データ収集方法、Co-occupation としての OTR-CL 関係の記載（クライアントと作業療法士の相互作用についての言及）とその記載内容について分析を行った。記載内容については、Pierce（2009）の Co-occupation の定義で共有されると言われている空間、時間、意味、感情、意志が、文献内に記載されているかを分析した。事例研究では、OTR-CL 関係の記載内容について分析を行った。なお、分析は筆頭筆者と共著者が協議を重ねて行なった上で、結果を学会で発表して討議を行なった。

表1. エビデンスレベルの分類

エビデンスレベル	内容
I	システマティック・レビュー/RCT のメタアナリシス
II	1 つ以上のランダム化比較試験による
III	非ランダム化比較試験による
IVa	分析疫学的研究（コホート研究）
IVb	分析疫学的研究（症例対照研究、横断研究）
V	記述研究（症例報告やケース・シリーズ）
VI	患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見

RCT: randomized controlled trial  
（福井他，2007）より引用

## 結果

### 1. 検索文献の内訳 (図1)

文献の全検索数は181件で、適合件数は85件であった。

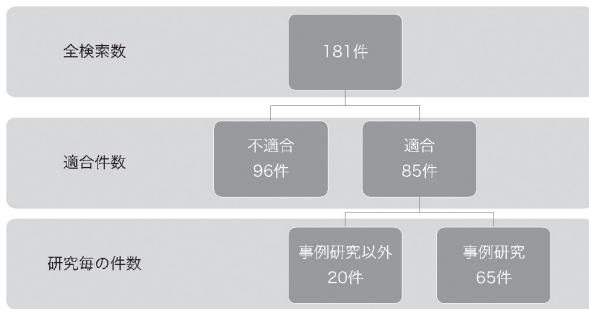


図1. 検索文献の内訳

### 2. 適合文献の特性

エビデンスレベルはIII 3件 (4%), IVb 4件 (5%), V 78件 (91%)であった。研究デザインは、比較研究 3件 (4%), 量的調査研究 4件 (5%), 質的研究 13件 (15%), 事例研究 65件 (76%)であり、ほとんどが記述的研究であった (図2)。

また、作業科学の視点で執筆された研究は小田原 (2014) が報告した1件であった。

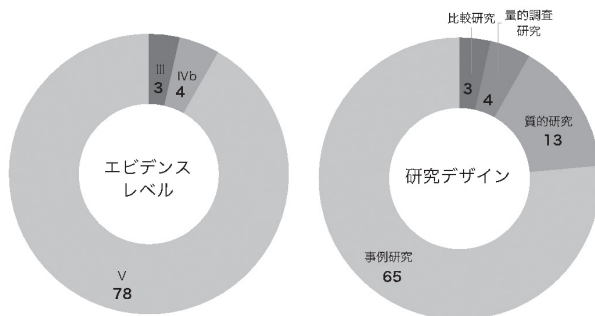


図2. 適合文献の内訳 (n=85)

### 3. 事例研究以外の研究の特性

事例研究以外の研究において研究対象者は作業療法士 10件 (50%), クライアント 4件 (20%), クライアントと作業療法士両者 2件 (10%), その他 4件 (20%)であった。作業療法士対象の研究は比較的多い一方で、クライアント、クライアントと作業療法士両者を対象としたものが少なかった (図3)。

データ収集方法はインタビュー 8件 (40%), 観察 2件 (10%), インタビューと観察 3件 (15%), アンケート 4件 (20%), その他 3件 (15%)であった。

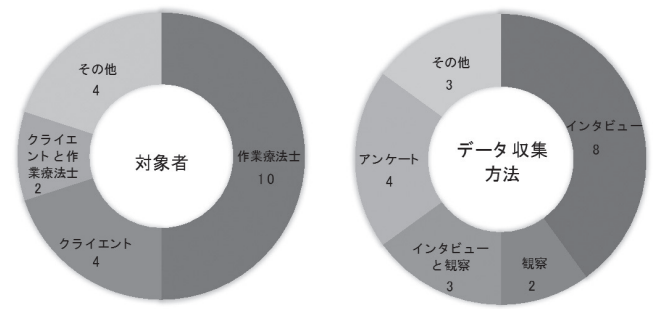


図3. 事例研究以外の研究の内訳 (n=20)

クライアントと作業療法士の Co-occupation としての OTR-CL 関係について記載あり 6件 (30%), 記載なし 14件 (70%)であった。Co-occupation としての OTR-CL 関係について記載あり 6件のうちの共有内容の記載については、空間 3件、時間 1件、意味 4件、感情 3件、意志 2件であった。また、空間、時間、意味、感情、意志すべて記載されていた研究は無く、その記載内容の組み合わせも多様であった (表2)。

表2. クライアントと作業療法士のCo-occupationについて記載があった研究の概要 (n=6)

著者 (掲載年)	研究デザイン	研究対象者	空間	時間	意味	感情	意志
尾崎 勝彦・他 (2015)	量的調査研究	作業療法士298名	○	○	×	×	○
小田原 悦子 (2014)	質的研究	作業療法士1名	○	×	○	×	×
辛島 千恵子 (2009)	質的研究	クライアント1名	×	×	×	○	×
長谷 龍太郎・他 (2007)	質的研究	作業療法士10名	○	×	○	○	○
佐石 綾子 (2006)	質的研究	クライアント11名 作業療法士7名	×	×	○	×	×
藤本 幹・他 (2005)	質的研究	作業療法士2名	×	×	○	○	×

※ ○: 記載あり ×: 記載なし

### 4. 事例研究の分析結果

全て作業療法士が著者である事例研究であった。事例研究の OTR-CL 関係の記載内容については、OTR-CL 関係の手段の利用 (以下: 手段) が、35件 (54%)であった。記載例としては、作業療法の説明と面接について留意して行なった結果、クライアントと作業療法士との協働に繋がり、クライアントの作業が可能になったというもの

であった。また、OTR-CL関係の目的利用(以下:目的)が、30件(46%)であった。記載例としては、急性期の統合失調症のクライアントに、作業療法士との信頼関係構築を目指して関わった結果、地域生活に復帰することができたというものであった。領域別 OTR-CL 関係の記述内容は、身体障害領域 15 件(手段;11 件, 目的; 4 件), 精神障害領域 32 件(手段;14 件, 目的;18 件), 老年期領域 17 件(手段; 10 件, 目的; 7 件), 発達障害領域 1 件(手段; 0 件, 目的; 1 件)であった。

## 考察

### 1. OTR-CL 関係についての研究方法の課題

OTR-CL 関係についての研究は、ほとんどが記述的研究であり、事例研究が多数を占めていた。Kottorp 他(2015)は、研究エビデンスの階層において、作業療法におけるエビデンスをそれぞれのレベルで提供し続ける必要があると述べており、今後幅広いレベルの研究をさらに進んでいく必要があると考えられる。事例研究はより良い理論的根拠と、より多くの比較対照試験に向けた動機付けが与えられる(Kottorp 他, 2015)と報告されているため、今後は事例研究の分析結果から少なかった、身体障害領域、老年期領域、発達障害領域の研究を行っていく必要があると考えられる。もちろん、エビデンスレベルの高いランダム化比較試験を行うことにより、領域や事例を超えた OTR-CL 関係について言及できるのではないかと考えられる。

事例研究以外の分析結果より、研究対象者においては、クライアント、クライアントと作業療法士両者を対象にしたものが少ない。作業療法では人々の主観的な参加の経験に価値をおく必要がある(WFOT, 2010)と言われていることから、クライアントを対象とした研究を行う必要がある。クライアントと作業療法士両者を対象にした研究においては、クライアント、作業療法士ともに様々な価値観を持っており、その相互作用においてはより複雑なことが予想されるため、研究デザインを考えることが難しく、少ないと考えられる。しかし作業療法士とクライアントを個別に研究対象者とした研究でなく、両者を主体として研究した方が、OTR-CL 関係が一番理解しやすくなるのではないかと考えられる。このことは、事例研究がすべて作業療法士からみたクライアントの記述であり、著者が第三者として OTR-CL 関係を記述したものはないことから、両者を主体として研究する必要があると考えられる。データ

収集方法は、インタビューは多く、観察は少なかったが、作業療法は‘すること(doin)’に焦点を当てる(Wilcock,2006)ため、一緒に行っている実際の作業療法場面を観察し、その後インタビューで研究対象者の言動の意味を確認すると、OTR-CL 関係をより理解できるのではないかと考えられる。

### 2. 作業科学の視点から考える OTR-CL 関係

作業科学の視点が含まれた研究は小田原(2014)が報告した1件のみであった。小田原(2014)は作業療法士がクライアントと状況を共有し、同じ方向を目指して作業に従事する現象を表現する「作業的場所」(Hasselkus, 1999)の視点から作業療法士の臨床経験を探索し、作業的場所にはクライアントの安全な日常活動の参加という新しい治療的意味があることを示唆し、Hasselkus が指摘した治療的意味より広い意味があることを提言した。

事例研究以外の研究の中で、Co-occupation としての OTR-CL 関係について記載があったのは、30%であり、OTR-CL 関係についての研究を Co-occupation の視点からとらえることができるものは少なかった。さらに、クライアントと作業療法士の共有内容についての記載は極端に少なかった。‘Co-occupation’は必ずしも共有する空間、時間、意味、感情、意志の中で発生するとは限らない(Pierce, 2009)と言われており、今回の共有内容の組み合わせが多様であったという結果からも支持できる。つまり空間等が共有されていなくてもクライアントと作業療法士の相互作用がある Co-occupation も存在すると言えるため、空間等の共有の有無とクライアントと作業療法士の相互作用についてのデータを収集する研究が、さらに必要だと考えられる。

このように作業科学は OTR-CL 関係を様々な視点から理解することができると考えられるため、作業科学の視点を含んだ研究が推進されることが望まれると考えられた。

## まとめ

日本における OTR-CL 関係についての研究の課題としては、①事例研究だけではなく幅広いレベルの研究を行う必要がある、②作業療法士とクライアント両者を主体として研究を行う必要がある、③観察とインタビューで研究対象者の言動の意味を理解する研究を行う必要がある、④空間、時間、意味、感情、意志の共有の有無とクライアントと作業療法士の相互作用についてのデータを収集する研究を行う必要があることが示唆された。



## 文献

- Boyt Schell B.A, Scaffa M.E, Gillen G, Cohn E.S (2014). Contemporary Occupational Therapy Practice. *Willard & Spackman's Occupational Therapy*, 12<sup>th</sup> Ed, Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp.47-58.
- 藤本幹, 田中義人, 八田達夫 (2005). 重症心身障害児を対象とした作業療法士の治療の実践過程の分析. *作業療法*, 24, 133-144.
- 伍石紋子 (2006). 「身体を回復させること」に対する〈消極的態度〉の隠蔽プロセスについての一考察—リハビリテーション病院でのフィールドワークから—. *作業療法*, 25, 239-248.
- Hasselkus B.R. (1999). Occupational space and occupational place. *Journal of Occupational Science*. 6, 75-79.
- 一般社団法人日本作業療法士協会 (2017). 事例報告書作成の手引き (第 2.0 版) 生活行為向上マネジメント事例. <<http://www.jaot.or.jp/wp-content/uploads/2017/08/MTDLP17730.pdf>> 参照日 2017.10.7.
- 辛島千恵子 (2009). 情動的コミュニケーションを基盤とした働きかけと現象学的分析—自閉症児の志向性から作業療法の成果を問う—. *小児保健研究*, 68, 681-691.
- Kottorp A, Fisher A.G (2015). Evidence-based Occupational Therapy 2.0—Developing Evidence for Occupation. *作業療法*, 34, 349-360.
- 河野崇, 京極真 (2015). 回復期リハビリテーション病棟に入院する患者が作業療法士に対して抱く信念対立と対処法の構造. *作業療法*, 34, 530-540.
- 長谷龍太郎, 山田孝 (2007). 脳性マヒ児に対する作業療法におけるクリニカルリーズニング区分の研究. *日本保健科学学会誌*, 10, 101-115.
- 小田原悦子 (2014). 新しい作業的場所—作業療法士のクリニカルリーズニング—. *作業療法*, 33, 401-410.
- 小野健一 (2015). 認知症高齢者の家族介護者に対する共作業支援尺度の開発. 吉備国際大学大学院保健科学研究科保健科学専攻学位論文, 5.
- 尾崎勝彦, 宮前珠子, 鈴木達也, 山田美代子 (2015). 「作業療法に拒否的な態度を示すクライアントが前向きになるきっかけ」に関する探索的研究. *作業療法*, 34, 414-425.
- Palmadottir Gudrun (2006). Client-Therapist Relationships: Experiences of Occupational Therapy Clients in Rehabilitation. *British Journal of Occupational Therapy*, 69, pp.394-401.
- Pierce, D. (2003). *Occupation by design: Building therapeutic power*. F. A. Davis, Philadelphia.
- Pierce, D. (2009). Co-occupation: The challenges of defining concepts original to occupational science. *Journal of Occupational Science*, 16, pp203-207.
- World Federation of Occupational Therapists (2010). Client-centredness in Occupational Therapy CM2010. <<http://www.wfot.org/ResourceCentre.aspx>> 参照日 2017.7.29.
- Wilcock, AA. (2006). *An Occupational Perspective of Health 2nd Ed*. Slack, Thorofare.
- 山根寛. 序章 二つのコミュニケーション. 治療・援助における二つのコミュニケーション—作業を用いる療法の治療機序と治療関係の構築—. 三輪書店, pp1-10.
- 吉川ひろみ (2017). 「作業」ってなんだろう 作業科学入門 第2版. 医歯薬出版.
- 福井次矢, 吉田雅博, 山口直人 (2007). エビデンスのレベル分類. *Minds 診療ガイドライン選定部会 (監修), Minds 診療ガイドライン作成の手引き 2007*. 医学書院, pp.15.